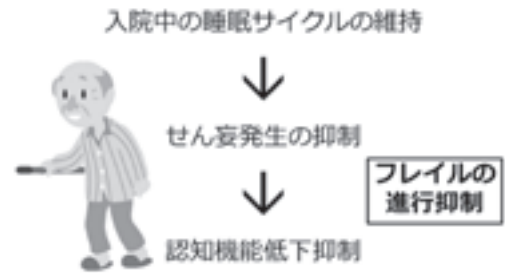


高齢心不全患者のフレイル進行抑制を 目指した多職種連携による 地域包括ケアシステムの研究開発

上田 和孝 氏

東京大学大学院医学系研究科ユビキタス予防医学講座 特任助教



1.背景

超高齢化社会の到来に伴い、地域における高齢心不全患者数は近年、「心不全パンデミック」とも称されるほどに爆発的に増加してきている。高齢者の大きな特徴の一つとしてフレイル(frailty)が挙げられる。フレイルとは、高齢者における筋力・活動性の低下(身体的フレイル)や認知機能・精神活動の低下(精神的フレイル)など、健康障害を起しやす脆弱な状態を指し(図1)、フレイルの合併はQOLの低下や生命予後悪化と密接に関連する。高齢心不全患者に適切な医療を提供し、健康寿命を延伸させるためには、多職種かつ地域包括ケアによるフレイル抑制への効果的な取り組みが欠かせない。一方で、正確なデータ解析に基づくエビデンスを有する施策は限られているのが現状である。



申請者らは以前、持続点滴を用いない経口薬による治療が、心不全入院患者のADL(日常生活動作)維持に有効であることを見出し、身体的フレイル進行抑制のための一つのエビデンスとして報告した。一方で、認知症や高齢者うつ病を含む精神的フレイルもまた、対策の欠かせない領域である。高齢者は入院によって認知機能低下をきたすことがあり、そこには入院中のせん妄の発生の有無が関連していることが知られている。せん妄発生の要因として生活環境の変化に伴う睡眠時間や質の低下が関連している可能性が考えられ、申請者らは、今回新たにこの点を明らかにする臨床試験を開始した。

2.目的

本研究では、経口薬による心不全治療が、高齢入院患者の「せん妄」の出現や認知機能の低下を抑制し、精神的フレイルの進行を抑止できるかを検討するとともに、睡眠時間とせん妄発症の関連性も明らかにする。

3.計画

本研究は、急性心不全に対する経口薬を用いた治療が、従来の持続点滴による治療に対し、入院中のせん妄状態の出現頻度や認知機能にどのように影響するかについて無作為ランダム化並行群間比較を行うものである。

急性心不全の診断で入院した患者に対し、入院当日に文書および口頭による説明で試験参加の同意を得た後、経口薬にて加療する群と、持続点滴治療にて加療する群の2群に無作為に割付けて治療を継続する。主要エンドポイントはせん妄の発生頻度とする。国際的に標準的な指標(Confusion Assessment Method; CAM)を用いて、入院日当日から10日間連続してせん妄の判定を行う。副次的エンドポイントは、入院時及び入院10、30日目におけるMini-Mental State Examination(MMSE)による認知機能、マット型睡眠測定装置による入院中の睡眠時間等とする。解析はstudent's t-testによる2群間比較、重回帰分析による測定値等の各種パラメータの多変量解析を行う。

4.期待される成果

本研究によって、以下の成果が期待できる。

- ・フレイル進展抑制に目を向けた心不全治療の重要性の提起。
- ・高齢者における環境変化に伴う睡眠形態の変化への対応の重要性の提起。
- ・多職種連携によるフレイル抑制への取り組みの進展。
- ・高齢者のフレイル抑制に向けた新たな地域包括ケアモデルの構築。